

3 協会のあゆみ

(1) 卓球の沿革

世界における卓球は 1889 年頃英国人のジェームス・ギブ氏が最初といわれているが、はっきりした文献はなく発祥地がどこであるかも明らかになっていない。

日本には明治 35 年 (1902 年)、体操研究のためヨーロッパへ留学していた坪井玄道氏 (東京高等師範学校教授) が帰国の際、ピンポン用具一式を持ち帰ったのが最初である。その後明治 42 年 (1909 年) に第 1 回東京連合ピンポン大会 (会場慶応大学) が開かれ、大正 7 年 (1918 年) には東京日々新聞主催の大会で初めて「卓球」という言葉が新聞に使われたという。

大正 15 年 (1926 年) に国際卓球連盟設立会議を開催、この年の 12 月には第 1 回総会と第 1 回世界卓球選手権大会が開かれ総会では憲章とルールを制定した。卓球台の大きさ (274 cm × 152.5 cm) と高さ (76 cm) は現在と同じである。また、昭和 12 年にネットの高さが 15.25 cm に変更され、1 ゲーム 20 分制が採用された。

日本では昭和 2 年 (1927 年) に個人の資格で国際卓連に加入、別の選手が初めての国際大会の第 8 回極東オリンピック大会 (上海) に参加、男子シングルスに優勝している。また昭和 6 年 (1931 年) にそれまで乱立していた協会・連盟が大合同して「日本卓球会」(後の日本卓球協会) を創設した。(日本卓球協会の「写真で見る日本卓球史」による)

(2) 米沢における芽生え (戦前時代)

本県への卓球導入は意外に古く、大正時代の末期には鶴岡地区で盛んにおこなわれたという。米沢においても大正末期から昭和の初めにかけて普及し、米沢商業学校・米沢工業学校・置賜農業学校の 3 実業学校でリクリエーション的に行われていた。

一方中央においては立教大学や早稲田大学が大学リーグや全国大学学生選手権の王座を争っていた。米沢商業学校出身で立教大学に進学した神尾信蔵は多少卓球の経験のあることから同大学の選手として大学リーグや全国大学卓球選手権大会などに出場し左利きの選手として華々しく活躍したのであったが、米沢に帰省の折り母校米商を指導したという。これがその後の米商卓球部の大活躍の一因をなしたといわれる。また、米沢に正規の設備や技術を最初に伝えたのも神尾信蔵である。

また昭和 3 年早稲田大学に進学した駒形俊夫 (大正 13 年 3 月米沢中学校卒) が米沢の卓球の育成向上を志し、兄の駒形祐規を動かして昭和 4 年春に第 1 回の米沢市と置賜地区による「1 市 3 郡卓球大会」を開催した。これが米沢および置賜地方における組織立った卓球活動の第一歩であったといえる。

これを機にこの年、形ばかりの米沢卓球協会を創設し、会長には井上周蔵が推され事務所は糸屋運動具店に置かれた。しかしこれは全国大会出場の母体で、組織としては認められていない。

この頃早稲田大学に進学した駒形俊夫は生まれて初めて握ったラケットだったが理論的な技法、独創的な打法で目覚しい活躍

をして、同部の主将の座に押し上がった。彼は昭和4年明治神宮奉祝全国大会（現在の全日本選手権大会）の男子シングルスで全国第3位、昭和5年全国推薦卓球大会（主催者が異なる）では堂々の優勝者となる。第1回1市3郡卓球大会で優勝した米沢チーム（篠原・神尾・駒形）は当時行われていた全国都市対抗卓球大会に山形県代表として最初の出場をしたのであった。しかし全国大会では惜しくも初戦敗退となったが全国大会出場は米沢の卓球界にとって以後の発展の芽生えとも言うべきもので、その種を蒔いたものと考えられる。

翌昭和5年米沢における第2回1市3郡卓球大会には早稲田大学卓球部の選手4人を招いて審判をしてもらい、終了後に模範試合を披露した。米沢では卓球技術もカット、ショート守備型一辺倒であったが早大の選手はロング、バックの攻撃型の猛打を振るったという。これには卓球選手や一般観衆が度肝を抜かれたそうであるが、これをきっかけに米沢の卓球のレベルが一気に向上した。

早稲田大学卓球部は昭和5年以来しばしば訪れ、米沢のみならず山形県下の指導を行なった。その技術向上に向けた積極的な指導は山形市と米沢市の技術の急上昇の形で表れ、全国都市対抗大会には山形県から2市チームが出場する状態になり、それが米沢と山形の2市対抗試合を開く機運になったのである。第1回対抗試合は昭和9年8月に行われたが両軍稀に見る大接戦となり7対6で米沢チームの勝利となった。この両市対抗戦は県の卓球進歩に多大の足跡を残したものであり、後には酒田・鶴岡を加えて覇を争うようになった。

（3）協会の設立（昭和21～33年）

戦時中中断されていた卓球の活動も戦後すぐに再開された。全国的には、昭和21年、戦後復活最初の大会は国民体育大会と全日本選手権大会を兼ねて、個人戦のみが大阪・宝塚市で開催された。

また、全国学校対抗卓球選手権大会もこの年復活し、第1部大学高専、第2部男子中等学校、第3部女学校に分かれて開催され、米沢商業学校が山形県代表として参加し、準々決勝まで進みベスト8に輝いている。翌昭和22年には第2回国民体育大会に成年男子の部の山形県代表選手として、秋葉真治（米沢商業高出身・米沢営林局）が出場、中等学校個人の部（この年は個人のみ）には白根沢利雄（米沢興譲館中）が出場している。

昭和23年の全国学校対抗大会（現在の全国高校総体）の男子高校の部には米沢第一高（現興譲館高）が県優勝で出場、2回戦で前年度優勝の栃木商業高に敗れた。

このように米沢では県内でもいち早く高校生が活躍していたが、昭和21年に組織として1市3郡（米沢市と東西置賜郡）を地域とする「米沢地区卓球協会」設立の機運が生まれ、駒形祐規、西方常蔵、鹿俣栄寿、渡辺喜代次、高橋哲夫等が糸屋二階に集まり、会長に駒形祐規、理事長に高橋哲夫が推され、事務所は高橋哲夫勤務の市役所内にある米沢工業振興協会内に置かれた。

昭和21年設立の「山形県卓球協会」（会長酒井直次郎、理事長斎藤俊夫、事務局は鶴岡地区）と「米沢市体育会」（昭和21年設立昭和23年に「米沢市体育協会」と改称）にも加盟している。

その後昭和25年には協会事務局を齋藤副会長宅の満津屋（マツヤ）運動具店（米沢市幸町）に移し、組み合わせ会議なども満津屋二階で行われ、昭和33年まで続いている。

昭和24年には会長に白田虎雄（米沢電線社長）、副会長に西方常蔵（西方燃料店社長）、齋藤（マツヤ運動具店主）、理事長に高橋哲夫（西方商店）、理事には穂保洋策（米沢二中）、尾形祐一（米沢電通）、秋葉真治（米沢営林署）、福田俊助（織物業自営）、横山文男（佐治産業）、三浦章一（割烹みうら）がなりその運営に当たった。当時は協会役員ほとんどが一般社会人で占められていた。

なお、昭和32年には6月29日～7月1日、米沢東高校で山形県高校総体卓球競技が初めて開催された。主管が高体連卓球部・米沢地区卓球協会に申し込み先が米沢市教育委員会内大会事務局宛となっているのが当時の組織関係を良く表している。

(4) 協会の充実期(昭和34～43年)

やがて高校生の活躍が活発になってくるにつれて、高校の先生方も協会役員として参加するようになり、協会事務局も昭和34・35年には米沢家政高校(昭和37年からは米沢中央高校と改称、事務局長有路光雄)、昭和36・37年は米沢工業高校(事務局長齋藤俊也)に移し、昭和38年は再び米沢中央高校(事務局長有路光雄)へ、更に昭和39年から昭和45年までは米沢工業高校(事務局長齋藤俊也)に事務局を置いた。この時期の役員は会長が白田虎雄、副会長は西方常蔵、理事長に高橋哲夫（三友堂病院）、事務局長に齋藤俊也(米沢工業高)、理事は穂

保洋策(米沢中央高コーチ)、有路光雄(米沢中央高)、太田嘉雄(米沢商業高)であった。

昭和39年4月に第15回山形県総合体育大会（兼国体予選）を米沢興譲小学校で開いている。

また昭和39・40年には米沢工業高が山形県高等学校総合体育大会において男子団体に連続優勝をし、米沢四中が山形県中学校体育大会で昭和39年男子団体、昭和41年には男子・女子とも団体優勝するなど、この時期は中学生や高校生の活躍が目覚ましい。また、指導者としての学校の先生や一般の人、ループドライブなど新しい卓球の技術や、昭和34年に禁止されたスポンジラバーに変わる裏ソフトラバー(厚さ4ミリ以内)の用具の研究に熱心であった。そこで協会の事業として、中学と高校が連携をとりながら技術向上のための講習会の実施なども活発に行われた。

なお山形県中学校卓球大会は昭和29年が最初であるが、正式に山形県中体連の大会となったのは昭和36年からである。また、山形県高校新人卓球大会が最初に行われたのは昭和36年である。

(5) 置賜地区卓球協会の誕生

(昭和44～45年)

平成16年発行の「長井市卓球協会設立35周年記念誌」によると、

『長井市周辺地域の普及発展に伴い「米沢地区卓球協会」の業務が増えたことと、全ての大会の会場が米沢市であり大会への参加は、長井市周辺地域の選手にとって、国鉄米坂線を利用して一日がかりの大仕事であった事などを考え、業務分担の機運が高まり「あやめクラブ」の役員と「米沢地区

卓球協会」の幹部と話し合いを重ね、昭和39年「米沢地区卓球協会長井支部」を発足した。』とある。

昭和44年になると登録数も当時の記録によると次のように大変多くなってきた。

種目	性別	米 沢		東西置賜		合 計	
		団体	人数	団体	人数	団体	人数
一般	男	11	43	7	21	18	64
	女	3	11	0	0	3	11
	計	14	54	7	21	21	75
高校	男	7	118	10	134	17	252
	女	8	112	8	78	16	190
	計	15	230	18	212	33	442
中学	男	6	103	2	22	8	125
	女	6	49	1	12	7	61
	計	12	152	3	34	15	186
合計		41	436	28	267	69	703

各種大会も参加人数が多くなり、さばき切れない状況から、特に長井地区より分割の話が持ち上がり、昭和44年7月に長井支部の設立総会が長井工業高校で開かれ、ここに正式に「米沢地区卓球協会長井支部」が発足した。支部長後藤文彌、副支部長早川正、理事菅野昭一、四釜正志、齋藤悟であり、早速全日本地区予選会を長井市の会場で行い友好を深めた。

しかし、このままでは大所帯の地区予選会や、代表数が少ないなど悩みは解消できないため、発展的に分離したほうがよいということで、翌年昭和45年4月から、長井・南陽市と小国・飯豊・白鷹・川西・高畠町の2市5町を含む「東西置賜地区卓球協会」(会長武者仁一)が独立発足することとなった。昭和57年には「置賜地区卓球協会」と名称を変更して現在に至っている。

(6) 協会の安定期(昭和46～56年)

いよいよ米沢市だけの「米沢地区卓球協会」となったが、大会や事業などますます活発になっていった。昭和46年から協会事務局は米沢東高校(事務局長齋藤俊也)に移り、卓球技術向上の強化講習会や、審判講習会の開催など組織的活動も活発になってきた。

中学の卓球部の活躍も目覚しく、特に山形県中学大会の男子団体では昭和44年から昭和49年までの間に、米沢二中が3回、米沢三中が1回優勝し、女子団体でも昭和45年から昭和53年までの間に米沢二中が4回、米沢四中が2回優勝している。ただ全国中学校大会は昭和43・44年が講習会・練習会形式であり、第1回の昭和45年はシングルスのみ、昭和46・47年は団体のみで、団体とシングルスが行われたのは第4回の昭和48年からである。

「米沢地区卓球協会」のほうでも昭和52年に役員の一部変更があり、会長白田虎雄(自営)は同じであるが副会長に高橋哲夫(三友堂病院)、理事長に齋藤俊也(米沢東高)が新任となり、理事に亀岡剛(米沢中央高)、白岩正隆(米沢女子高)、皆川頼郎(栗野商事)、高橋浩一(東北電力)がなった。

この頃から、各種目でスポーツ少年団が設立され、卓球でも昭和54年に、米沢市全域を対象にした「米沢市卓球スポーツ少年団」(団長小笠原富雄・団員35名)が誕生した。これは卓球協会の下部組織ではないが、協会とも連携をとり勝負にこだわることなく協調性を重視し、人間関係を大事にする指導目標を持って活動している。

また事業として、昭和55年7月に第31回山形県総体卓球競技(国体予選)が米沢

東高と米沢二中を会場に開催された。

また、置賜地区高体連の強化事業として、昭和56年を第1回として福島県北地区高体連との合同練習会(練習試合)が開かれており、現在もなお継続して実施されている。

(7) 協会の発展(昭和57～63年)

昭和57年から新しく会長に篠原守信(篠原医院)がなり、前会長の白田虎雄は顧問になった。また副会長に小笠原富雄(山形大工学部)が新しく就任し、高橋哲夫の二人となり、理事長は変わらず齋藤俊也(事務局も米東高)である。

この年の協会決算を見てみると次のようである。

昭和57年度 決算表

収 入

1. 登録料	178,600
2. 参加料	452,400
3. 寄付金	84,000
4. 繰越金	3,599
合 計	718,599

支 出

1. 登録料	138,300
2. 事業費	259,210
3. 会議費	109,000
4. 事務費	24,540
5. 通信費	7,660
6. 交際費	31,040
7. 負担金	50,000
8. 表彰費	78,700
合 計	698,450

次いで昭和59年には事務局を米沢中央高校に移し、役員も次のように大幅に変わった。会長は同じく篠原守信(篠原医院)で副会

長は小笠原富雄(山形大工学部)・齋藤俊也(長井高)・松田俊春(松田医院)がなり、理事長・事務局長には亀岡剛(米沢中央高)がなった。この年初めて監事が置かれ皆川頼郎(自営)・今井寿子(主婦)が就任している。

協会の事業として、まず昭和58年9月に、世界チャンピオンの長谷川信彦氏を講師とする強化講習会を開き、次いで昭和59年4月には、当時現役として活躍中の齋藤清氏(全日本卓球選手権大会で4年連続男子単複優勝・単のみで8回優勝、山形県出身・明治大→日産自動車)と嶋内よし子氏(全日本女子単2回優勝、高知県出身・三井銀行)を招いて強化講習会を開いた。他にも毎年のように講習会を開き、技術の向上を図っている。

昭和63年7月には第39回山形県総体(国体予選)が山形大学工学部を会場に開催された。

(8) 協会の変革(平成元～11年)

平成元年から会長が新しく小笠原富雄(山形大工学部)が就任し、理事長はそのまま亀岡剛(米沢中央高)であるが事務局が米沢女子高(事務局長大滝勤)に移り、特別に専任の会計担当橋本敏郎(自営)を置くなど体制の強化に努めた。また、理事も各方面から委嘱する事とし、総勢25名の大世帯となった。

また、平成4年には第47回「べにばな国体」が山形県で開催され、卓球は少年の部が長井市(成年の部は河北町)を会場に開かれるのに伴い、米沢地区卓球協会も全面的な協力をした。

平成8年には理事長に大滝勤(米沢女子高)が事務局長を兼ねてなり、前理事長の亀

岡剛(米沢中央高)は副会長についた。

本卓球協会もますます発展充実の時期を迎えて、スポ少・中学・高校・一般とお互いに連携をとりながら活躍し、米沢市からの助成金などもあって、一般・高校を対象とする技術講習会(平成7・8・9年、講師は羅武漢氏)や中学生対象の講習会(平成8年、講師は小林茂仁氏)の開催、そして平成9年には市内小学・中学・高校生の選抜指定選手を対象とする強化練習会を月2回の割合で年間を通して実施した。

平成9年7月に、第52回国民体育大会山形県予選会(県総体はなくなった)を米沢市営体育館で開催した。

なお、平成10年度の選手登録状況は次のようになっている。

		男子	女子	合計
一般	団体	7	4	11
	人数	76	31	107
高校	団体	5	5	10
	人数	69	57	126
中学	団体	7	7	14
	人数	136	142	278
合計	団体	19	16	35
	人数	281	230	511

また、平成10年度の役員構成は、次のようになっている。

会長	小笠原富雄	顧問	高橋哲夫
副会長	齋藤俊也	松田俊春	亀岡剛
理事長	大滝勤	副理事長	金子雅明
理事	佐竹勝實	小笠原まさ子	山田小八郎
	足立幸一郎	石山勘一	関谷知樹
	樋口隆	井上浩之	菅沼正
	高橋良郎	遠藤日出男	大谷薫
	渋谷淳一	板垣孝司	樋口哲弘
	菅野彰浩	橋本敏郎	

	土田清 皆川文子 板垣健二 川口広 佐々木健一 遠藤透 大木弘一 我妻秀彰 男鹿善幸 今修一 前山弘幸 橋本光司
監事	濱田明伸 皆川すか
事務局	局長/金子雅明 会計/菅沼正 局員/井上浩之 橋本光司 渋谷淳一



平成10年度米沢地区卓球協会役員
(以上平成10年度分は「米沢市体協50年誌」による)

(9) 現在の協会(平成12～18年)

平成12年には会長が交代し、新しく齋藤俊也が就任した。そして前会長の小笠原富雄は新設の名誉会長についた。また、理事長に樋口哲弘(南原中)が就き、副理事長が金子雅明(ピンポンショップカネコ)、事務局局長に大滝勤(九里学園)、会計は菅沼正(米東高)が担当した。

またこの頃は、卓球の成績面でも一般・高校共にすばらしい活躍をし、高校男子では山形県高校総体で米沢中央高校が平成11年の団体とシングルス(和久井怜)、ダブルス(和久井怜・横山和弘)の優勝に続き、平成12年にも団体とシングルス(横澤智樹)、ダブルス(横澤智樹・横山和弘)共に優勝するなど米沢中央高校は全盛時代を作った。他にも特筆すべきは、酒田市で行われた平成11年度全国スポーツリ克雷ション大会卓球の部で、金子雅明・皆川文子の出場し

た山形県代表さくらんぼチームが、堂々の第2位に入賞したことである。

平成16年からは新会長に亀岡剛（米中央高）が就任し、前会長の齋藤俊也（九里高）は名誉会長となった。また、平成14年度には理事長だった樋口哲弘（櫛引南小）は人事異動の関係で理事長職を関谷知樹（米沢市役所）に譲った。事務局長も金子雅明（ピンポンショップカネコ）に変わり、会計は佐々木健一（米沢七中）が担当することとなり現在に至っている。

平成18年現在の現状を、特に記して置く。

① 平成18年度役員表

名誉会長 小笠原富雄 齋藤俊也
 会長 亀岡 剛
 副会長 松田俊春 足立幸一郎 樋口哲弘
 顧問 高橋 哲夫
 理事長 関谷 知樹
 副理事長 大滝 勤
 理事 佐竹勝實 小笠原まさ子 山田小八郎 皆川文子 板垣健二 川崎弘樹 井上浩之 男鹿善幸 今修一 孫田寿行 大木弘一 戸田良一 本田とみ子 卯月文一 金子雅明 上浦勤 小池正春 奥山均 荒井雄介 我孫子定彦 佐々木健一 菅野彰浩 遠藤佳奈 田中義明 柳町浩 菊地潤一 安部啓二 伊藤範夫 我妻啓一 吉田芳一 加藤博巳 松田真理子 山科美樹
 監事 濱田明伸 皆川すか
 事務局 局長 金子雅明
 局員 荒井雄介

会計 佐々木健一 菊地潤一
 記録 関谷知樹

② 平成18年度事業計画(主催事業)

上杉まつり卓球大会	5・4
ホープス・カブ・バンビ県予選会	5・20
国体地区予選会	6・18
米沢市民総体卓球大会	7・23
米沢市卓球選手権大会	8・19
全日本選手権地区予選会	8・20
置賜地区卓球選手権大会	12・23
ウインターフェスティバル in 米沢	12・16 ～17
中学校強化講習会	7・17
高校・社会人強化講習会	19・3・25

③ 平成18年度予算

収入の部

登録料	960,000
参加料	2,150,000
寄付補助金	180,000
雑収入	10,000
繰越金	1,300,000
合計	4,600,000

支出の部

登録料	920,000
事業費	1,400,000
強化費	350,000
会議費	330,000
事務費	30,000
通信費	20,000
慶弔費	20,000
負担金	130,000
備品消耗品費	100,000
褒賞費	80,000

審判部	40,000
記念事業費	700,000
国体積立金	400,000
予備費	80,000
合計	4,600,000

④ 平成18年度卓球協会登録料

少年の部	600円×人数
高校生の部	12,000円+1,400円×人数
大学生の部	12,000円+1,900円×人数
職場の部	20,000円+2,500円×人数
クラブの部	15,000円+2,500円×人数
個人の部	1名につき4,000円

⑤ 60周年記念誌編集委員

米沢地区卓球協会も昭和21年に正式に発足して以来今年で60周年を迎えることとなり、過去を纏めることもよいのではと、ここに次のような編集委員で60周年記念誌を発行することとなった次第である。

委員長	齋藤 俊也
委員	小笠原富雄 亀岡剛 樋口哲弘 関谷知樹 金子雅明 大滝勤 佐々木健一 小笠原まさ子 皆川文子

(10) 置賜地区高体連卓球専門部

置賜地区高体連は山形県高体連置賜支部として昭和25年に正式に発足しているが、卓球の活動は各学校毎戦前からのつながりで活発に行われていた。特に米商・興譲館・米東は当時強かった鶴岡地区や山形地区の学校と互角に戦い、県優勝するなど全国大会への出場も果たしている。しかし、組織としての卓球専門部はまだ力が弱い。

初代委員長の楡井寿澄(米東)(昭25～32)は纏めるのに大分苦勞したようである。それでも昭和32年には米沢で初めて山形県高校総体を米沢東高校で開催した。

第2代廣居晃太郎(高畠)(昭33～35)の頃は県優勝もできない時代であった。

第3代齋藤俊也(米工→米東)(昭36～53)の時代では置賜地区で優勝すれば、県大会で優勝とまでいわれ、昭和39・40年には米工高が男子団体優勝し個人でも多数優勝している。県高校総体も県内各地区持ち回りで開かれ、昭和40年には米沢中央高校、昭和52年と59年に米沢市営体育館で開催したが、その後米沢では開かれていない。

第4代齋藤悟(長井工)(昭54～平3)は長井工業高校の全盛時代を築き上げ、昭和53年および昭和63～平成4年の計7回の男子団体優勝と個人優勝もしている。平成4年のべにばな国体では、少年男子チームの選手全員を同高で固め、自ら監督として出場のため委員長の職を退いた。べにばな国体ではベスト8に入賞した。

第5代石山勘一(米東)(平4～9)は平成4年のべにばな国体少年の部が、長井市で開催され大変忙しい時期だった。

第6代新野敦(置農)(平10～12)の時代になると男子団体で米沢中央高が平成11～12年の連続優勝して気を吐いた。

第7代渋谷淳一(米工→長井)(平13～現在)の時代になると、九里学園高が男子生徒の入学で男子部を立ち上げ中国より留学生受け入れで一躍強豪高になった。

以上地区高体連は米沢地区卓球協会と密接な関係にあるので記した。